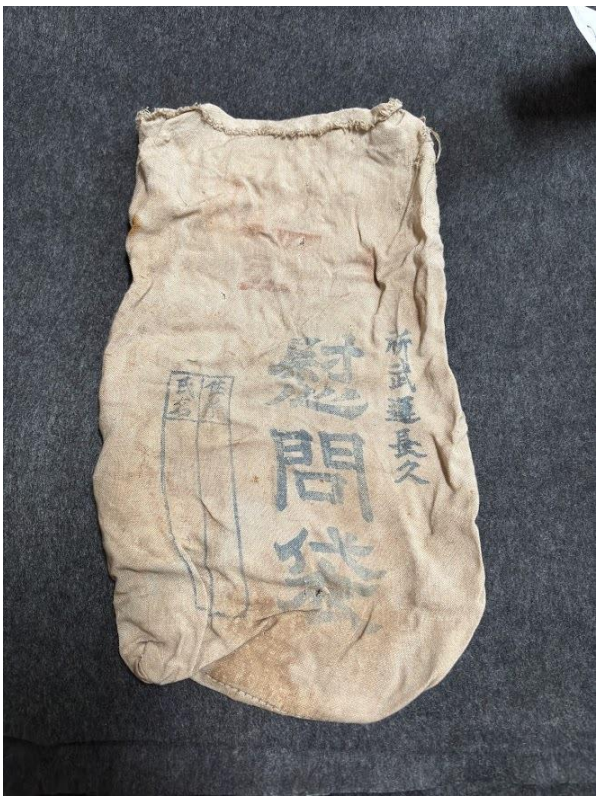
慰問袋



慰問袋右側縫い目

戦地の兵士を勇気づけ、慰めるために、家族や学校の団体などから送られた袋。昭和 12（1937）年の日中戦争以降、盛んに送られるようになり、戦地の兵士へ慰問袋や慰問文を送る行為は「銃後のつとめ」とされ、大いに勧められました。中身には石けん、キャラメル、絵はがきなどの日用雑貨、少年少女たちによる慰問文や人形、婦人会による千人針などが納められました。また、慰問袋の袋は衣料切符制の中で、唯一切符なしで購入できる布製品でした。戦局が厳しくなり、物資不足となると、袋や入れる品物も不足し、だんだんと慰問袋を用意することができなくなっていきました。

この慰問袋は日進から戦 地へ行った人が持っていた慰問袋です。中になにが入っていたのかは分かりませんが、二つ折りで丁寧に縫い合わせて作られていることが分かります。